

方 墳 二 態

平 良 泰 久

いま私達という丹波・丹後は、もとは丹波国であって、それが丹波・丹後の二国に分れたのは和銅6年(713)のことであった。この律令制古代国家成立以前、すなわち古墳時代の丹波の中心地が分国後の丹波ではなく丹後にあったことは、『古事記』・『日本書紀』等の古文獻にみえる説話伝承や巨大古墳その他の考古資料から明らかである。^(注1)

では、その当時の丹波はどのような歩みをたどっていたのか。小稿は、丹波の各小地域に共通して顕著な分布を示す中期方墳を素材とした古墳時代丹波の覚え書きである。

I 丹波の小地域

丹波は山国である。山並の間に小さな盆地が点在し、それらを結ぶように諸河川が流れている。これらの諸河川は標高400~700mの丹波山地を分水嶺とし、北流して日本海に注ぐ由良川水系と、南へ流れて大阪湾へ注ぐ大堰川、そして瀬戸内海に注ぐ加古川の3水系に収束する。本稿では、日本海側の由良川水系を北丹波、瀬戸内側の大堰川水系を南丹波(以上京都府)、同じく加古川水系を西丹波(兵庫県)と呼ぶこととする。^(注2)

さて、丹波は方墳の分布が顕著なところであるが、^(注3)ここでとりあげるのは各地域を代表する中期の大型方墳である。北丹波では綾部市菖蒲塚古墳・聖塚古墳、福知山市妙見1号墳、南丹波では亀岡市坊主塚古墳・天神塚古墳・榊塚古墳・瀧ノ花塚古墳、西丹波では多紀郡篠山町北条古墳などがそれにあたる。ただ、西丹波の方墳はあらためて整理するほどに内容が判明していないので、のちほど必要に応じて関説することとしたい。

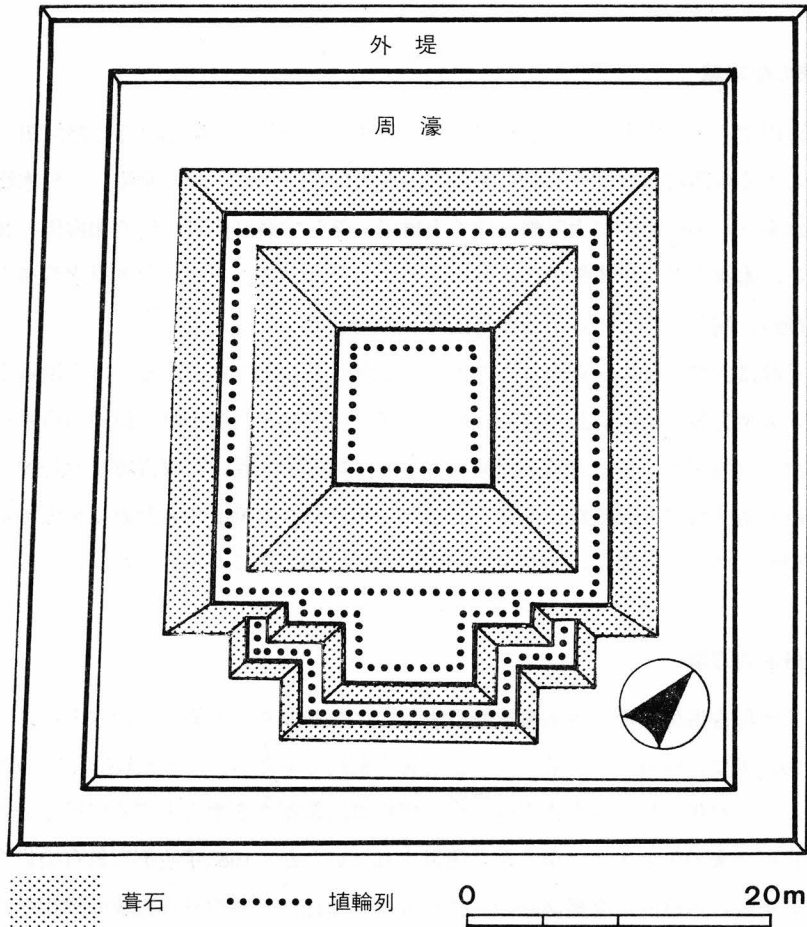
II 北丹波の方墳

菖蒲塚・聖塚古墳は綾部市多田町取畦の水田中に2基並列して築かれた大型の方墳である。古く1910年代に梅原末治が墳丘と出土遺物の概要を紹介し、その後1968年に京都府教育委員会が、^(注5)1983年には山城考古学研究会が墳丘の測量調査を中心とする成果を公表するなど、北丹波最大の古墳として早くから注目されていたが、1983年綾部市教育委員会によって墳丘の周辺に本格的な発掘調査のメスが入り、墳丘の形態や外部施設の様相が詳しく判明した。^(注7)以下、上掲の諸報告をもとに様相を復元的にのべる。

表1 菖蒲塚・聖塚古墳の墳丘規模

	下 段			上 段		
	辺長(m)	高 (m)	斜 面 角	辺長(m)	高 (m)	斜 面 角
菖 蒲 塚	32.3	2.4	29°	21.3	3.6	29°
聖 塚	54.2	3.3	25~29°	35.0	4.3	25°

菖蒲塚古墳 墳丘の対角線が方位に合う二段築成の方墳(表1)で、南東辺に二重に突出する造出しをもつ。発掘調査のデータにもとづき古墳の形態を復原的に描いたのが図1である。造出しも二段に築くが、その下段は主丘下段斜面にとり付く。この造出しの段築平坦面を主丘にも延長して想定することすなわち主丘を三段築とするには、確認された墳丘の傾斜角29°を無視して著しくきつくしなければならず、施工上もまず困難であろう。



第1図 菖蒲塚古墳の復原図

墳丘の斜面には上下二段とも葺石を葺き、段築平坦面には埴輪列をめぐらす。同様な埴輪列は墳頂部にも存在するものとみられる。

古墳の外域施設としては周濠と外堤がある。それは現在の水田畦畔にも痕跡をとどめているが、北東辺は後世の改変による乱れが著しい。周濠底の高さは各辺とも標高59.3m前後、うすく泥土層が堆積しており、同一水面の湛水濠である。地形の高い南東辺での現水田面から濠底までの深さは1.5m、これに対し低い方の北西辺では0.8mと落差がきついが、下段造出しの高さが1.1m程度なので、低い北西側でも構造上はそれほど大がかりな盛土等による築堤を必要とするわけではない。周濠の幅は造出しのある南東辺がやや広くて約11m、他の三辺は7～8m前後、外堤幅は4m前後を測る。

主体部に関する知見はなく、これまでに得られた遺物は円筒・朝顔・器材等の埴輪類のみである。現状ではこれが年代推定の唯一の根拠といえる。採集資料を図示した『丹波の古墳Ⅰ』によれば、円筒埴輪(同書第20図)は外面タテハケ、内面は指オサエ、円形透孔、台形タガ、有黒斑の特徴をもつ。大きさは直径に大小二種がある。発掘資料の中には、これらと異なり外面断続ヨコハケ調整のもの(『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』第12図の4)があるが、両者の数量比は不明。朝顔形埴輪(同図の2)は円筒部を三段に作り、上段の幅が狭く中・下段が広い一風変わった形態である。上段に円形透孔をあけ、外面タテハケ調整する。底径19cmで小型の円筒埴輪の大きさに対応する。一部に古い特徴をとどめるが、川西宏幸編年^(注8)のⅢ期、5世紀前半にあたとみられる。

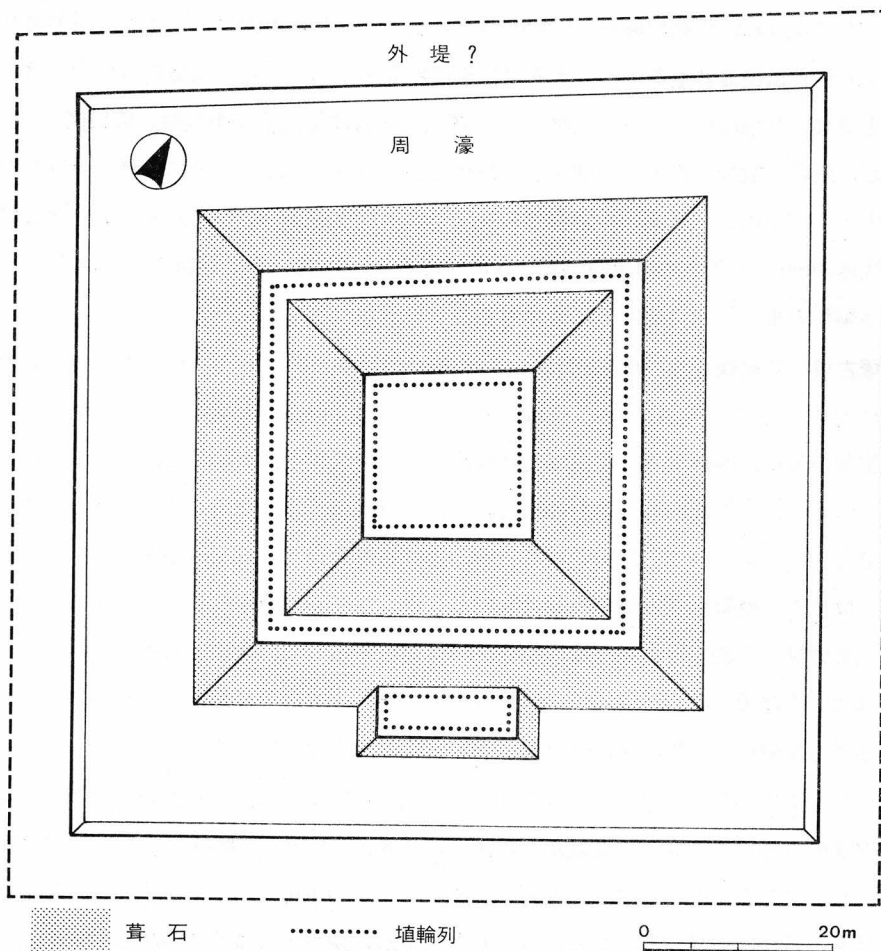
聖塚古墳 菖蒲塚古墳の南東約120mに相似た方位をとって並ぶ方墳であるが、規模は格段に大きい(表1)。ちなみに、聖塚の墳丘の長さ54.2mは菖蒲塚の周濠・外堤を含めた外域施設の規模に匹敵する。菖蒲塚と同様、古墳の復原図を図2に示した。ただ、墳丘の立面については、現状の墳丘下段は水田耕作による裾部の侵蝕が激しく、もともとこれが一段であったかあるいは二段であったのか、実は発掘調査によっても確かめられていないので、墳丘が二段築か三段築か確証はない。この点は先の菖蒲塚の場合も同様だが、ここでは地形測量や発掘で得られた墳丘の寸法、角度を準用して二段築と考えた。三段築すなわち現状の下段を二段に造るには、段築平坦面の幅を半分以下に狭め、墳丘斜面を35°程度にまで急勾配にとる等、上段の仕様に著しく変更を加えれば可能である。

主丘の南東辺に付く造出しは長さ5.0m、推定幅17.5m、特異な形態の菖蒲塚とは異なり、普通の方形とみられる。濠底からの高さは0.8m、水田下に埋没しており、発掘によってはじめて存在が明らかになったものである。後世の水田化によって上部が削平された可能性もあるが、主丘下段と同じ高さをもち現地地形に姿をとどめる菖蒲塚と対比すれば、こうした現況の相違も、たんなる偶然ではなく、本来の造出しの形態の違いを反映したも

のともみなし得る。ここでは、菖蒲塚とは異なり段築のない低い造出しとみておく。この造出しは、主丘が二段築であれば下段斜面にとり付き、三段築であれば下段上面のテラスに続くことになる。

葦石・埴輪列の施設状況は菖蒲塚に等しい。造出しで樹立状態の埴輪は確認されていないが、まわりの周濠からかなりの量の埴輪類が出土しており、ここにも樹立されていたものとみられる。

周濠は、現在の水田畦畔にその痕跡が明瞭であったが、発掘で確かめられた事実は上述の菖蒲塚の様相に等しい。周濠底の標高57.1~57.4m、幅は底部で約12.5m、外側の上端を現畦畔にとればさらに3mほどプラスされる。発掘では、外堤及び南西辺の周濠外肩は確認されていない。



第2図 聖塚古墳の復原図

内部構造と副葬品については、1891年の地元民による発掘の概要を梅原末治が報告している。^(注9) 内部主体は粘土槨を略式の石室で覆ったものと推測され、そこから仿製の平縁神獸鏡1、勾玉1、ガラス玉約30、短甲1、冑1、劍、直刀、矛、鏃、銛等が出土した。このうち古墳の年代推定に有効なのは勾玉と短甲である。勾玉は4世紀後葉に新たに出現する碧玉材の片面穿孔のものであり、^(注10) 短甲は三角板革綴短甲で付属具として頸鐙を伴い、4世紀末に出現、5世紀前半に盛行する型式^(注11)である。

埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪の他に衣蓋・短甲草摺等の器材埴輪がある。円筒埴輪はこれまでに図示されたものはすべて、断続ヨコハケ、円形透孔、台形タガ、有黒斑の特徴をもつ。大きさに大小があり、小型のもの(『丹波の古墳Ⅰ』第21図の中・下)は底径約19cm、最下段の幅が15cm前後と広く、上掲菖蒲塚の朝顔形埴輪の特徴と一致する。朝顔形埴輪の円筒部とみてよいだろう。

菖蒲塚と聖塚の前後関係 以上のように、この両墳は堂々たる中期古墳の外観を呈しているが、段築、葺石、埴輪列に加えて湛水濠まで備えた古墳は北丹波では他に例がなく、また前方後円墳を含めても聖塚古墳は当地域最大の古墳である。すなわち、両墳は5世紀前半代に築造された北丹波の地域首長墓なのである。

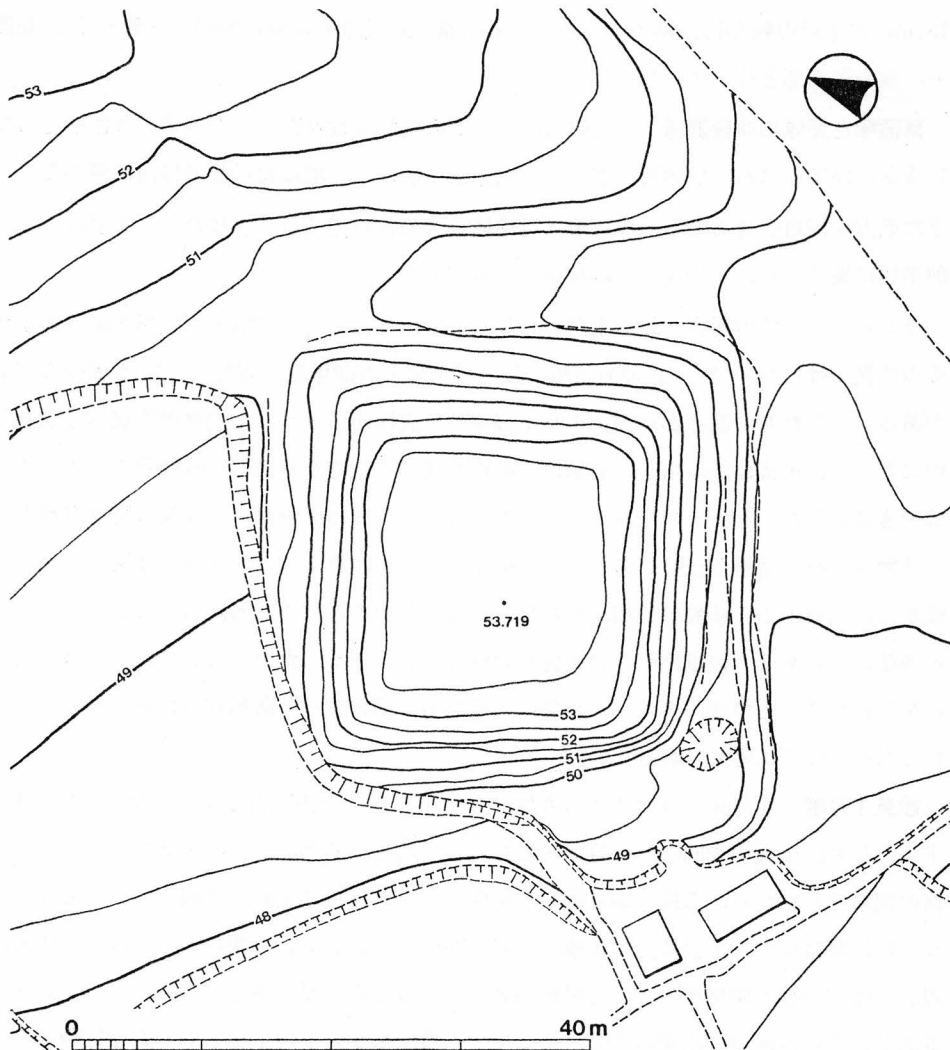
ところで、両墳の新古を知る手懸りとなるのは出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪であるが、その位置づけについて、『丹波の古墳Ⅰ』と『聖塚・菖蒲塚調査概報』とでは多少のズレがある。すなわち、前書が外面タテハケ調整の菖蒲塚からヨコハケ調整の聖塚へと明解なのに対して、後書は両墳出土の埴輪に「前後関係を決定できるほどの時期差を認めることはできなかった」とするのである。この点は、公表資料によれば、菖蒲塚の発掘資料の中に外面ヨコハケ調整(上述)があることを指すものと思われるが、いま詳細は明らかでない。確かに、両墳出土の埴輪の様相がそれほど単純でないことは当然考えられることであり、各技法の存否やその数量比等、発掘資料の整理検討を期待したい。ここでは、両書に図示された資料にもとづき、タテハケ調整の円筒埴輪の卓越する菖蒲塚古墳が先行して築造されたものと仮りに考えておきたい。

妙見1号墳 北丹波にはいま一つ大型の方墳がある。上掲二古墳から由良川を約14km下った福知山市大字大門小字妙見にある妙見1号墳^(注12)である(図3)。二段築であるが、丘陵裾の傾斜地にあたり、丘陵と切り離れた東側の掘割りは墳丘上段を区画するにとどまり、ここに段築はない。上段墳丘の規模は一辺約38m、高さ3.7mを測る。下段は北・西・南辺とも畑作や桧の植林等によって損壊が著しく、ほとんど原形をとどめていない。原形を推測し得るのは西辺の南側のみで、そこでの上段下縁から下段下縁までの距離は約7m、これは東辺の掘割りの幅に一致する。墳丘下段の規模は、西側での高さ2m、長さは東辺

が約38m, 他の三辺が約43mと計測されているが, この場合上段と下段は相似形にならず, 上段は下段の東に偏して築かれたやや変則的な古墳ということになる。ただしこの不整合は, 東側の掘割りを計画上の下段墳丘とみなせば解消する。こうした掘割りのあり方は, 丘陵の高い側の施工にしばしばみられる“手抜き”である。この案の墳丘復原長は52m, 聖塚の墳丘に匹敵することになるが, 発掘調査による確認を待ちたい。

墳丘の外表施設として葺石, 埴輪列を備えているが, 外域施設の周濠はない。採集された円筒埴輪はヨコハケ調整, 無黒斑で, 川西編年のIV期, 5世紀後半にあたる。

妙見1号墳は, 聖塚古墳に続く大型方墳であるが, 周濠を欠く。これらの首長墓の動向



第3図 妙見1号墳の地形図(注12文献, 一部改変)

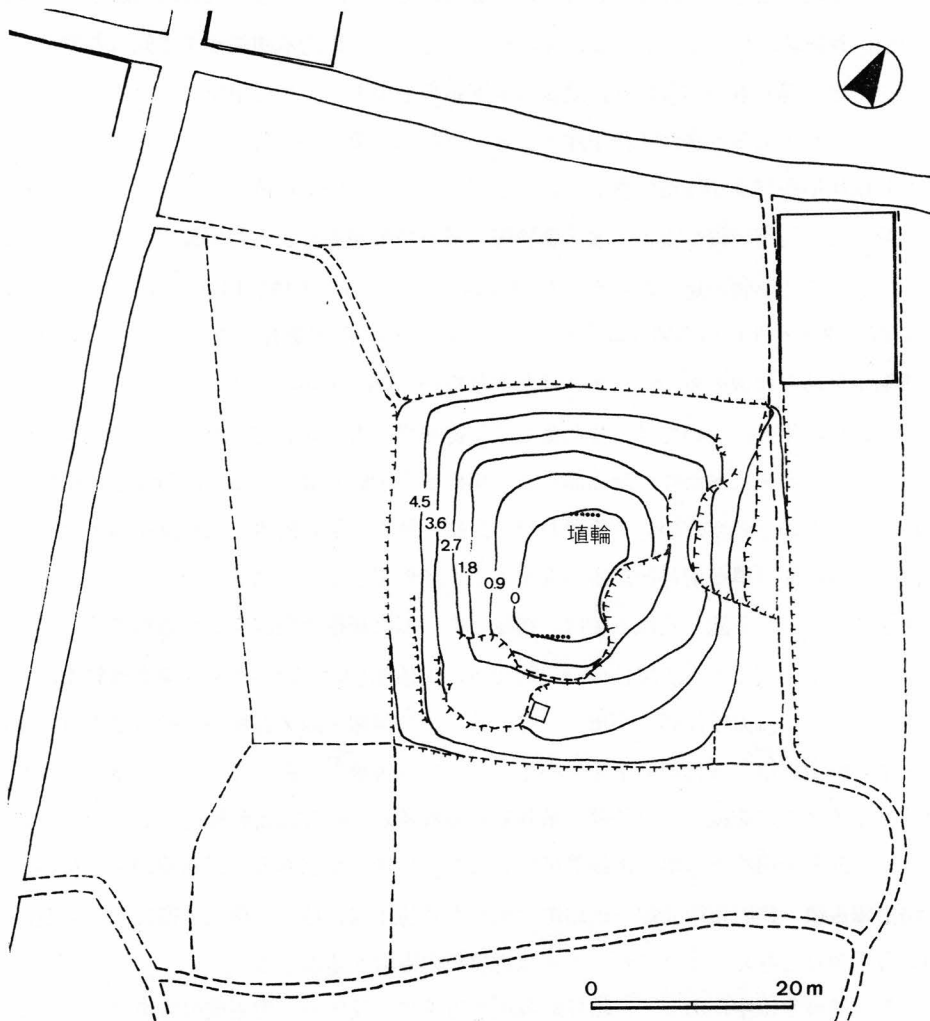
については別書^(注13)に譲り、ここでは、段築や葺石、埴輪列だけでなく本格的な周濠までも備えた菖蒲塚・聖塚の両墳が際立って特異なものであることのみを記して先を急ぎたい。

III 南丹波の方墳

南丹波では比較的内容の判明している柵塚古墳と坊主塚古墳をとりあげよう。

柵塚古墳 この古墳は亀岡市篠町野条にあった大型の方墳であるが、いまは墳丘を削平して人家が立ち並び原形をとどめない。もとは前方後円墳の野条古墳、方墳の瀧ノ花塚古墳等とともに一つの古墳群を形成していたらしいが、ほとんど内容不明のまま消滅した。

この古墳については、早く^(注14)^(注15)1917・36年の二度にわたる梅原末治の調査と戦後の1957年の



第4図 柵塚古墳の地形図(注15文献から合成作図)

安井良三氏等による破壊された主体部や出土遺物に関する調査の記録がある。^(注16)

墳丘は二段に築き、四隅を結ぶ対角線がほぼ方位に合う。規模は一辺約40m、高さ約6mと計測されているが、上掲菖蒲塚・聖塚の発掘結果等^(注17)を参考にすれば、墳丘基底部の規模はさらに大きく50m前後であったものとみられる。墳丘には葦石、埴輪がある。後者は埴輪頂部に方形にめぐる列の一部が確認されており、段築平坦面にもめぐっていたものとみてよい。墳丘のまわりには幅15m前後の細長い水田がめぐっており、周濠の痕跡とみられる。ここはまだ一部が水田として残っており、将来発掘で確認してほしいところだ(図4)。

内部主体は、上掲安井氏の聞取調査によれば礫詰め^(注18)の排水溝を伴う木棺直葬であったらしい。埴輪頂下約1.3mで遺物が出土したというが、その位置は埴輪頂部の南東に偏しているのでさらに別の主体部が併葬されていた可能性がある。副葬品は、仿製四獣鏡1、不明鏡1の他、鉄鏃30、のみ1、刀子2、挂甲片1、刀片1、用途不明鉄棒1が知られている。年代を特定し得るものがないが、鉄鏃は柳葉系のもので、5世紀中頃に出現する長頸鏃は含まないようである。また「挂甲片1」というのはおそらく小札のことであろうが、そうであれば挂甲かどうか特定できない。「挂甲」の存在については留保しておくべきであろう。

埴輪には、円筒埴輪や衣蓋・家・動物等の形象埴輪がある。人物埴輪として報告されたものはおそらく動物の足であろう。円筒埴輪(『南丹地方の方墳』13頁の写真)は、底径22cm、外面タテハケののち断続ヨコハケ、内面指ナデ、円形透孔、方形タガ、有黒斑で、川西編年Ⅲ期の特徴をもつ。ハケメはかなり粗い(3条/1cm)。

この古墳の年代については、これまで5世紀後半と考えられていたが、円筒埴輪の特徴からは5世紀前半にあたり、副葬品もこの年代観と矛盾しないので、古墳は5世紀前半に築造されたものと考えたい。そうすれば、段築、葦石、埴輪列さらに周濠を備えたものとしては、現在知り得る南丹波最古の大型方墳と評価できることになる。

隣接して存在する瀧ノ花塚古墳^(注18)は、柵塚とあい似た規模と内容をもつ方墳であるが、様相はさらに不分明である。墳丘の一辺約30m、主体部(木棺直葬)から仿製神獣鏡1、不明鏡1、挂甲1、直刀4、剣1が出土している。この柵塚・瀧ノ花塚を含む古墳群は、4世紀後半の向山古墳^(注19)、5世紀前葉を中心とする三ツ塚古墳群^(注20)に続き5世紀代に築造された、亀岡盆地の南の口を扼する首長墓の系列とみられるが、相互に比較検討できるほどの資料がなく、前方後円墳と方墳の関係等についても、いま一步立ち入った議論ができない。

坊主塚古墳 亀岡市の北端、馬路町池尻にある坊主塚古墳は、柵塚で留保した問題についても手懸りを与えてくれるが、まずは古墳そのものからみよう。^(注21)

この古墳は水田中であって、墳丘の各辺が方位に一致する二段築成の方墳である。現状での規模は約34m、高さ約6mを測るが、墳丘裾は崖状を呈し、耕作による侵蝕が進んで

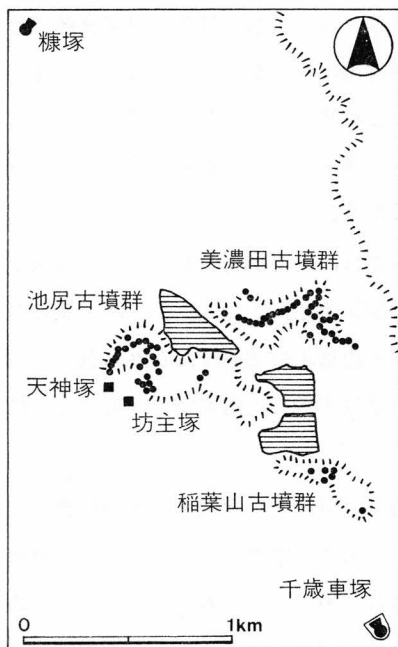
いる。本来の規模は一回り大きく43m前後と推定できる。現在の水田畦畔に周濠痕跡はそれほど明瞭でないが、この地域の平地に立地する中期古墳の様相からみて、周濠は存在するものとみられる。墳丘斜面には葺石を葺き、埴輪はこれまで確認されていなかったが、最近樋口隆久氏によって円筒埴輪・朝顔形埴輪片が数点採集された。細部の特徴までは分らないが、断続ヨコハケ、無黒斑、川西編年Ⅳ期にあたる。

主体部は、1956年亀岡市史編纂委員会によって発掘され、概要が判明している。墳頂下約1.5mの何の痕跡もないところから鏡・武器・武具等の遺物が出土したといい、残された朱の範囲等から、長さ4.2m、幅0.5m前後の南北軸の箱形木棺であったとみられる。副葬品は、棺外西肩に添えられていたとみられる矛を除けばすべて棺内遺物とみてよく、鏡のみが北にあり、他は南側に集中していた。

副葬品の内訳は、仿製平縁神獸鏡1、短甲1、頸鎧1、肩鎧1、草摺1、衝角付冑1、鉄鏃約25、直刀4、剣2(1口は鹿角装柄縁付)、矛1である。甲冑一組は短甲の中に付属具(頸鎧・肩鎧・草摺)と冑が納められていたものであり、短甲・冑とも最も新しい型式の横矧板鋌留式である。鉄鏃もまた5世紀半ばに出現する長頸鏃である。こうした副葬品と先にふれた埴輪の示す年代観は矛盾せず、この古墳の築造年代を5世紀後半の中に考えることができる。

ところで、この古墳は、副葬品の全容のほぼ判明した南丹波では唯一の中期古墳といってよいが、副葬品について注意すべき点が二、三ある。それは玉類を欠くことと須恵器の出土である。前者は、武器・武具の存在と表裏の現象として評価されることが多いが、当時の発掘状況その他からみて、この点を積極的に評価することは留保すべきであろう。後者の須恵器の出土については、発掘調査の「墳丘平面圖作成中に祝部土器片一ヶ」と主体部の「剣第一号を取上げ、その附近の床面を調査中、薄手の小さな祝部土器破片」を採集したという。墳丘採集品はともかく、主体部出土品は「朱状になっていた土中」で採集されたものであり、副葬品であったことはまず疑いないが、いまその特徴を知り得ないのが惜まれる。その他の副葬品の様相からみて、それは初期須恵器であった可能性が高い。

前方後円墳と方墳 この坊主塚の北西50mには天神塚古墳があり、北丹波の菖蒲塚・聖塚と同様に2基並存する方墳として古くから著名である。天神塚は詳細不明だが、坊主塚と同様な規模をもち、相前後する時期のものとみられている。また、この両墳の北側を遮る光徳寺山の丘陵上には総数約60基の池尻・美濃田古墳群が形成されている。これまでこの古墳群は後期の群集墳と考えられ、坊主塚・天神塚との関係が特に問題にされたことはなかったが、実はこの両者が深く関連するらしいことを示す事実が最近判明した。それは1983年6月、丘陵上に重機が入り、池尻古墳群の数基が損壊を受けたが、その際に出土



第5図 坊主塚古墳付近の古墳分布

した土師器、須恵器、埴輪等の遺物は5世紀代から6世紀代までのものを含んでいる。すなわち、この古墳群は中期には築造を開始しており、丘陵の下の坊主塚・天神塚の年代と重なることが判明したのである。

坊主塚・天神塚を考える上でもう一つ注意したいのは、南東1.6kmにある千歳車塚(全長79m)、北1.8kmにある糠塚(全長65m)の二大前方後円墳である(図5)。糠塚は墳丘の変形が著しく、年代推定の根拠が乏しいが、平地に立地することや帆立貝形の墳形から5世紀代のものとみてよいであろうし、車塚は段築、葺石、埴輪の外表三要素と外域施設としての盾形周濠を備えた堂々たる畿内大王墓型古墳^(注24)である。車塚出土の円筒埴輪は川西編年Ⅳ期、5世紀後葉の築造とみられる。^(注25)

これらの古墳の詳かな前後関係等については将来の検討に委ねざるを得ないが、これらを連環する古墳グループと捉えれば、大型前方後円墳を盟主とする地域首長層の階梯構造が見えてくる。すなわち、大型前方後円墳(車塚・糠塚)―大型方墳(坊主塚・天神塚)―中小円墳(池尻古墳群)である。ここでは、上掲の榊塚の場合にははっきりしなかった前方後円墳と方墳の関係―大型方墳の位置が明確である。これらの方墳は、地域の古墳の中において、陪塚もしくは中小古墳でもなければ最高首長墓でもなく、その中間に位置づけられるのであり、その被葬者は最高首長を補佐し、それに次ぐ権威を保持した有力首長層とみなし得る。なお、これら方墳被葬者について、武器・武具の出土に関わり軍事的性格を強調する説があるが、武器・武具の多量副葬を特に方墳の属性とみることには疑問がある。^(注26)

IV 方墳二態

方墳二態 さて、前節までに検討した南北両丹波の大型方墳は、いずれも外表三要素―段築・葺石・埴輪列を備え、かつ北丹波の妙見1号墳以外は周濠をも備えるかもしくは備えていると推測される点で共通している。こうした特徴は、墳形が前方後円墳でなく方墳であることを除けば、畿内大王墓の外部構造そのものである。だが、ここで私が問題にしたいのはこの「共通性」ではなく、上掲方墳の地域における位置づけであり、古墳群また

やや広く古墳グループの中での「あり方の違い」である。それをいま約言すれば、方墳が地域の最高首長墓である北丹波と、方墳は前方後円墳に次ぐ規模をもち、最高首長を直接支えた首長層の墳墓である南丹波として表現できる。これが標題の方墳二態である。^(注27)

本稿では具体的に検討を加えなかった西丹波については、大型前方後円墳(雲部車塚)のもとに大型円墳(新宮古墳)・大型方墳(北条古墳)があり、南丹波の様相と基本的に等しい。

畿内の縮小版、南・西丹波 南・西丹波の方墳は、奈良県御所市の大型前方後円墳室大墓古墳と大型方墳猫塚古墳、大阪府羽曳野市墓山古墳と浄元寺山古墳他、京都府城陽市久津川車塚古墳と梶塚古墳、兵庫県姫路市壇場山古墳と山ノ越古墳等、畿内周辺の大古墳のあり方に通じるところであり、かつ畿内大王墓の外部構造をそのまま採用していることは既に指摘したとおりであって、ある意味では畿内の大古墳群の縮小版とさえいえる。この両地域の首長層は、畿内政権と分かちがたく深く結びついていたのである。

方墳の伝統、北丹波 いっぽう北丹波は、5世紀後半代の前方後円墳の出現まで、方墳が一貫して地域首長墓であり続けた特異な地域である。このことについては、この地域の首長層が他地域に従属していたために墳形の規制を受けて前方後円墳を築き得なかったものとも解し得るが、ここでは地域の首長層の歴史的主体性を示すものとみたい。それは、聖塚古墳が丹波の方墳の中で最大規模というだけでなく、体積では南丹波の千歳車塚古墳を凌ぎ西丹波の雲部車塚古墳に次ぐ丹波第2位にあたること、したがって聖塚の築かれた5世紀前半に限れば丹波最大の古墳であること、であり、さらにいま一つ重要なことは、こうした大型方墳がある時突如として出現するのではなく、弥生時代の方形墳墓の伝統を色濃くとどめた方墳一綾部市成山古墳群、福知山市宝蔵山古墳群、同狸谷古墳群、同谷尾谷古墳群等が古墳時代前期に盛んに築かれていることである。こうした方墳群のあるものには鏡・玉類等を伴い、既に首長墓とその他の古墳との格差が進行していた。

菖蒲塚・聖塚古墳の成立は、畿内政権との新たな関係の締結に成功した首長が、過去の方墳の伝統の上に畿内大王墓の外部構造をとりいれたものとみなし得る。その交渉の直接の相手方がどの地域勢力であったか、いまは特定できないが、二重造出しやその主丘への取り付き方、また朝顔形埴輪の形態等、特徴的な個性がいくつかあるので、今後他地域の類似例の発見によっては、漠然とした“畿内”から一步踏みこんだ検討も可能であろう。

なお、北丹波の方墳を考えるには、古墳時代を通じて方墳が卓越する地域として著名な出雲との関係や、また奈良県五条市北有智古墳群、三重県安芸郡安濃町明合古墳等の各地の大型方墳のあり方をも視野に入れて検討すべきであろうが、本稿の主題を越える。他日を期したい。

令制「丹波国」へ 以上、同様な規模と外部構造を備えた丹波の大型方墳が、実は似て

非なるものであることを指摘した。南北両丹波の首長層の構造の差異は明確であって、両地域は古墳時代中期にはなお互いに独自の地域勢力としての歩みを続けていたのである。

南北両丹波の古墳文化の違いは、これまでに指摘されたところであるが、^(注29)令制「丹波国」の範囲に共通して分布するかにみえた中期の大型方墳も、実はそうした地域的まとまりを示すものではなかった。だが、5世紀の後半代になると、各地域で新たな動きが始まる。^(注30)

「丹波国」の原像は、そうした古墳時代後期の動向の中に探り得るのであろうが、これについては稿を改めたい。

(平良泰久 = 京都府教育庁文化財保護課技師)

注1 『歴史公論88 古代の日本海文化』(雄山閣 1983年)ほか。

注2 別に、大堰川流域を中心とする地域を口丹(波)、由良川流域を中丹(波)、由良川河口部を除く丹後を奥丹(後)と呼ぶことがある。これは、京都府域に編入された丹波と丹後を、京都からの遠近によって唱えられた呼び方であって、丹波の地域区分の呼称法としては必ずしもふさわしくないので、ここではとらない。

注3 京都府立丹後郷土資料館『両丹地方の方墳』(常設展資料4 京都府立丹後郷土資料館 1978年)

注4 梅原末治「丹波国何鹿郡多田の方形古墳」(『考古学雑誌』第8巻第4号 考古学会 1917年)

梅原末治「多田村方形墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊 京都府 1919年)

注5 京都府教育委員会『京都の文化財 第2集 丹波篇』(京都府教育委員会 1968年)

注6 谷口智樹・義則敏彦「多田古墳群」(『丹波の古墳I—由良川流域の古墳I—』山城考古学研究会 1983年)

注7 中村孝行『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会 1984年)

注8 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978年)

注9 梅原末治「多田村方形墳」(前掲注4)

出土した副葬品のうちいま京都大学に所蔵するものは、『京都大学文学部考古学資料目録第2部』(京都大学文学部 1968年)に記載されている。

注10 小林行雄「神功・応神紀の時代」(『朝鮮学報』第36輯 朝鮮学会 1965年)

注11 小林謙一「弓矢と甲冑の変遷」(『古代史発掘 6 古墳と国家の成立』講談社 1975年)

注12 海老瀬敏正・石井清司・常盤井智行「妙見古墳群」(『丹波の古墳I』前掲注6)

注13 常盤井智行「由良川中流域の古墳の動向」(『丹波の古墳I』前掲注6)

注14 梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」(『考古学雑誌』第9巻第1号 考古学会 1918年)

梅原末治「篠村ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府 1920年)

注15 梅原末治「丹波篠村柵塚古墳」(『近畿地方古墳墓の調査二』日本古文化研究所 1937年)

注16 安井良三・白石太郎「口丹波篠村柵塚古墳」(『先史学研究』第1号 同志社大学文化史学科 1959年)

注17 発掘調査の結果、菖蒲塚の規模は24m→32.3m、聖塚は46m→54.2mに修正された。水田その他の開墾により墳丘裾の侵蝕が進む例は極めて多い。

- 注18 梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」(前掲注14)
梅原末治「篠村ノ古墳」(前掲注14)
- 注19 京都府教育委員会『京都府遺跡地図 第5分冊〔第2版〕』(京都府教育委員会 1986年)
- 注20 梅原末治「篠村ノ古墳」(前掲注14)
- 注21 梅原末治「池尻の坊主塚」(『南桑田郡誌』京都府南桑田郡教育会 1924年)
亀岡市史編纂委員会『亀岡市史 上巻』亀岡市役所 1960年)
- 注22 亀岡市史編纂委員会『亀岡市史 上巻』(前掲注21)以降、多くの論著がこれに従っている。
- 注23 亀岡市史編纂委員会『亀岡市史 上巻』(前掲注21)
- 注24 平良泰久「国家形成期の日本海—前半期大型古墳を中心として—」(『歴史公論88 古代の日本海文化』前掲注1)
- 注25 小池 寛「千歳車塚古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年)
- 注26 田中勝弘「方墳の性格—特に、近畿地方における中期方墳について—」(『古代文化』第32巻第8号 (財)古代学協会 1980年)
- 注27 方墳の類型に関しては次の研究がある。
西川 宏「方墳の性格と諸問題」(『私たちの考古学』第5巻第3号 考古学研究会 1959年)
山田良三「山城の方形墳」Ⅰ・Ⅱ(『古代学研究』第47・48号 古代学研究会 1967年)
是川 長「播磨地方の方形墳について」(『中国高速道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告』兵庫県教育委員会 1972年)
田中勝弘「方墳の性格—特に、近畿地方における中期方墳について—」(前掲注26)
本稿の課題との関係に限っていえば、山田類型が有効である。南丹波の榊塚・瀧ノ花塚・坊主塚が同類型の「Ⅳ大型前方後円墳を主墳とする古墳群に於ける独立方形墳」に、北丹波の菖蒲塚・聖塚・妙見1号墳が「Ⅴ古墳群構成の中核をなす独立方形墳」に相当する。西川・田中両類型では、基本的にはこの二者を一括して一類型として扱い、前方後円墳を主墳とするものと方墳を主墳とするものとが区別できない。是川類型は、播磨の方墳の編年と一体的に扱った地域性の強いもので、そのまま他地域に援用できない。
- 注28 石川 昇「旦波・山背の前方後円墳と体積」(『京都考古』第40号 京都考古刊行会 1985年)
- 注29 堤圭三郎「丹波地方の古墳」(『史跡でつづる京都の歴史』法律文化社 1977年)
奥村清一郎「丹波」(『歴史公論88 古代の日本海文化』前掲注1)
- 注30 平良泰久「綾部・福知山地方の古墳の周辺」(『京都考古』第16号 京都考古刊行会 1975年)